

河村会長ICFALレセプションご挨拶（2019年3月6日）

Good evening, ladies and gentlemen, and distinguished guests. I would like to speak in Japanese.

只今ご紹介を頂きました、衆議院議員の河村建夫でございます。私はILC議連会長及びILC誘致実現連絡協議会代表を務めております。今日は、議連幹部のメンバーと共に出席させて頂きました。お招きを頂き、またこうしてご挨拶を申し上げる機会を頂いたことを感謝申し上げます。

私が2017年の年末でございました、盛岡でILCの国際会議の際に講演を致しました、世界が国際連携よりも一国主義に陥るそうした中で、私どもはILCで「サイエンス・ファースト」の精神を掲げて、世界を繋いでいこうと宣言を致しました。以来、日本ではILC計画実現に向けて大きな進展がございました。今回のこの国際会議は次の段階への極めて重要な一里塚だと認識をしております。明日は、これまでの政治と研究者・産業界・地域で推進してきた体制から、行政が主体的に加わった新たな連携体制にいよいよ踏み出すことになるであります。皆さんには、それぞれのセクターからの意向、説明を総合して頂いて、わが国のILC計画実現に向けた意欲をよく理解をして頂きたいと思っております。

我々は、これまで国内外での政治的環境を作ることに邁進して参りました。今現在、政治と行政における大きな動きは、昨年9月に自民党ILC誘致実現連絡協議会を設立して、立法府として省庁・政策をまたいだ議論を始めたこととあります。その政治の動きと連動して、行政も文科省のみでなく他省庁をまたいだ意見集約の場をスタート致しました。そのような本格的な行政の動きも含めて、明日は文科省の局長から説明がなされると思っております。欧州での素粒子物理の戦略会議の議論も始まっており、この中での位置付けが、ILC実現において、極めて重要であると我々はよく認識致しております。

昨年末の日本の学術会議における答申が国内外に懸念を生んだことは承知を致しております。学術会議は、そもそも政策的判断や予算に権限がある組織ではありません。ただし日本の科学者の代表機関であり、その組織から、ILCの学術的意義が高く評価されたことは、わが国の科学技術政策において前向きに受け止めたいと思っております。それを受けて、文部科学大臣からはマスタープランという通常プロセスにおける検討の要請がなされました。なにぶん、プロセス重視のわが国の行政において、時間と労力がかかり、海外の皆様方にはご心配をおかけ致しておりますが、縦割り行政、単年度会計が基本のわが国の行政においては、必要な時間とプロセスでありまして、どうぞご理解頂きたいと思っております。

そういった行政の弊害を克服するためにも、このILC計画は、政治主導で省庁の枠組みを超えて実現すべきプロジェクトだと認識しています。それゆえに、国家プロジェクトとして通常の科学技術予算とは別枠での予算措置を実現すべく活動を進めておるところであります。

国内では、ILCに対する理解が大きく進展しております。メディアの注目度も極めて高く、連日のようにこのテーマが報道されています。過日、経済界からもわが国を代表する経済三団体が合同でILC誘致実現に向けたメッセージを発してくれました。誘致実現を求める全国からの署名は41万人を超えております。また、地元東北においては、学生が自ら署名活動を行って、現地にILC施

設が建設されることを切望しております。無理ありません。この東北大学の学生は素粒子物理学を学び、ILCの研究者になりたいと、目を輝かせて文部科学大臣宛の署名簿を私に託しました。

2013年以来進めてまいりました日米間での議会・政府間の関係強化に加え、昨年1月には我々は、政産官学でフランスとドイツに赴き、議会・政府との対話を開始しました。欧州からは、昨年5月と10月、二回に亘って、フランスのベシユト議員、ドイツのカウフマン議員が来日され、我々と議論を深めたと同時に、候補地の現地視察も行ったと伺っております。同じく昨年10月には、米国DOEのダバー次官が来日され、その際にもILCについて踏み込んだ議論が行われました。極めて前向きな議論であり、米国との連携は盤石だと断言できます。会合後に私からレターを送りましたが、ダバー次官からも先日レターを頂いたところであります。

いよいよ具体的な国際的議論を始める段階になっております。

国際分担では、ホスト国が担うのが適切な土木・設備のインフラ部分と、国際分担が適切な装置の部分とを切り分けて、技術的に確実なパートナー国で役割を分担しないと余分なコストが増大し、計画は失敗してしまいます。具体的な分担のイメージ、たたき台をまず作る必要があります。技術的な面からも世界の研究者の皆さんのご協力を是非お願いを申し上げます。

現日本安倍政権は、今年で6年を超えますが、その間、“地球儀を俯瞰する安倍外交”を展開してまいりました。その強いリーダーシップの成果として、今年ラグビーワールドカップ、議長国としてのG20が日本にて開催されます。そしていよいよ来年2020年には東京五輪・パラリンピックが開催されます。我々は、それに続く世界・人類への貢献として、ILC計画の日本誘致によるアジア初の大型国際研究拠点の建設を実現しようと思っております。この計画は、外交的・政治的にも非常に意義があるものであります。

社会的にも、政治的にも、行政的にも、環境が進展した今、政治の次の使命は建設予算の確保です。政府での行政プロセスと並行して、我々は政治・立法府の立場から、建設予算の措置のための活動を本格化してまいります。

本年、わが国は、天皇陛下が退位され、新天皇が即位される歴史的転換期でもあります。かつて、ノーベル化学賞を受賞した野依良治先生は、科学技術予算を削減する過去の政権に対して、「将来、歴史という法廷に立つ覚悟はあるのか。」と痛烈に批判されました。科学技術への投資は政治の責務であると考えております。我々は、ILCの日本誘致を、日本の新たな歴史、世界の新しい歴史を築く、未来への投資として政治が責任を持って取り組んでいく覚悟であります。

本日お集りの皆さんには、日本のILCに対する熱意をよく理解して頂いて、国際研究者組織として、計画をしっかりとサポート頂きたいと思っております。

“未来を切り拓くILC”。ともに実現に向けて頑張りましょう。

最後に、私はもう一度言います。「サイエンス・ファースト」!

Thank you very much.